

1 はじめに

さいたま教区は、「すべての人々、特に小さくされた人々と共に福音を」のビジョンのもとに、2000年からキリストのしるしとして生きるために、優先課題を決め取り組んできました。この精神の中で、2011年越谷市内に伝道所が開設されました。伝道所は「憩の家・水いっぱい」と名付けられ、単に信徒の集会やキリスト者の数を増やすだけでなく、神の普遍的な救済意志を受け、神から派遣されて、この社会を福音にかなった神の国に変革しようとするあらゆる活動を行うものとなりました。水いっぱい大切にすることは「誰もが、疲れた時に喉を潤す一杯の水のような存在になれる」、そして「人の孤独に寄り添える」こと。

開設から5年。地元の社会福祉協議会やご近所の協力を得ながら、カトリックの精神を隠さず地域の小さな存在になりました。この存在は「あなたのために何かしますよ」と「誰かが誰かを支援し・誰かに支援される」ものではなく、家庭的な暖かい雰囲気の中で互いに大切にしたいそんな場です。また、水いっぴいの活動は様々な方に出会える「出会いのきっかけ」となっています。そして出会った方々の中で数名の方が、その後洗礼を受けられ、今、それぞれの地域の小教区に集っておられます。

今回、2017年2月18日にさいたま教区事務所で行われたカトリック越谷伝道所「憩の家・水いっぱい」設立5周年の感謝の集いでの協力者の方々の語りをまとめました。

2 憩の家水いっぱい活動報告

(1) ふれあいサロン (注 越谷市社会福祉協議会の認定団体となっています)

【毎週水・木 (10時から16時) 憩の家にて ボランティア8名】

ふれあいのサロンの目的は「疲れた体を休めたい、誰かと話したい、人と触れ合いたい方の憩いの場」。参加者は年齢、性別を問わず、介護に疲れていたり、高齢で一人暮らしだったり、心や体の病の方、引きこもりの方等。費用は1回200円。一日の流れの中心は歓談、お茶、ランチ。三々五々テーブルを囲んで順にお茶やお菓子をつまみながら話します。出入りは自由。12時からマルコ神父お手製のイタリア料理、持ち寄ったデザート等を供します。様々な境遇の参加者やボランティアがそれぞれの悩み、苦しみ、楽しみなどの経験を抱えてテーブルを囲み、「いっぴいの水」のようなマルコ神父と共に心のこもったお食事を頂く集いです。互いに心で聴き、交わり、時には共感し、あるいは反発し、楽しい部分だけではないけれど、歓談とふれあいの中で、互いに交流し、気づき、癒され、情報交換の中で助言をしあい、社会やコミュニケーションの経験を培う等の経験をしてきました。ボランティアも一人ひとり、皆さんにゆったり過ごしてほしい、寄り添いたいと思い、心を込めてお料理を作り、話を傾聴しています。そして、何よりもマルコ神父のお料理と人のありのままを尊重しようとする姿勢、それがあつてのサロンです。(池ノ谷さん)

(2) 聞き屋

【毎週金（19時から21時）新越谷駅・南越谷駅前連絡通路にて ボランティア5名】

聞き屋の活動を始めて、実に色々な方々との出会いがありました。「どこかいい飲み屋はありませんか?」「今、ふられてしまって、一緒に飲んでくれないませんか?」と座り込む青年、進路に悩む中学生など。そのような出会いを通して、一人ひとり「誰かに聞いてほしい」「誰かと関わりたい」「誰かと分かち合いたい」という望みと共に「誰にも言えない心の重さ」を感じていることを知りました。時には、2時間立っていて、一人も来られない日もあります。しかし、目の前を通りすぎる人々の心の奥にある重いものが少しでも軽くなることを願いながら活動に参加しています。(大窄さん)

私が初めて聞き屋でボランティアしたのは、2013年11月でした。その中で出会ったNさんの話をさせてもらいます。Nさんと最初にあったのは、春に近い寒い日でNさんは路上で生活していました。毎週金曜日に聞き屋をしていると、待ちきれないのかNさんから聞き屋の方に歩いてくるようになって、月を追う毎に来る時間が早くなり、最終的には19時から21時まで横にいて話をするようになって、まるでボランティアのメンバーの様でした。彼は、人の悪口や社会や政治の悪口も言わず、ごく普通の日常会話が多く、いつだったか、小さな聖書を見せてもらった記憶があります。「信じてるってわけじゃないんですけどね」と恥ずかしそうにしていました。半年ほどその状態が続いたある日の聞き屋でNさんが「仕事が決まったんですよ」と笑顔で報告してくれました。働く時間が聞き屋の時間と重なり徐々に疎遠になり、それでも時間があれば来て「こんなことがあった、あんなことがあった」と話すNさんが少しずつ小奇麗になっていくのを見て、聞き屋のメンバー全員とても嬉しかったです。

Nさんと沢山の時間を話してみても、その人が望まなくても環境によっては路上生活者にならざるを得なかった人がいる事を知りました。一度躓いてしまうと社会復帰しにくい世の中で、人の話を聞き寄り添うことの大切さも知りました。会社で上司からいじめに遭いそれでも会社を辞められず、話しているうちに泣いてしまわれたOLさん、身内のご不幸を受け入れられない方、息子さんの仕事の事を悩まれるお母さん、何度面接を受けても仕事が見つからず家賃も払えなくなってしまうので不安だという男性。

続けているうちに、最初の頃感じた通りすがりの人たちからの刺すような視線は徐々に和らぎ、「今日は聞き屋の日か」位になってきた様に思います。ボールとカバンを抱えた部活帰りの高校生は手を挙げて挨拶し、別の方からは挨拶と共にお菓子やお寿司を頂きました。あの駅前連絡通路を通り過ぎながら、横目で見えていく人がいて、あそこで話したくなったら話を聞いてくれる、毎週金曜あそこに誰かがいる、そういう場所があればいいのだと思います。それが、聞き屋の傾聴ボランティアの丁度よいスタンスだと思っています。

(佐藤さん)

(3) ヨガ・散歩

【隔週土曜（13時半から16時） 散歩は越谷市内河川敷等景色の良い所、ヨガは憩の家6

畳和室、4畳半キッチンにて それぞれボランティア1名】

ヨガ：ヨーガという言葉は、サンスクリット語で「結ぶ」「つなぐ」を意味する「ユヅジュ」
yij に由来します。長い歴史の中で人間の意識と神の意識を結ぶ道として用いられるよう
になりました。また、ヨーガは心身の働きに関して、そこに恒常性があると考えます。人間
は本来の適応力や順応力をよみがえらせる訓練をすれば、不調和に陥っていた心身を調和
へと回復していくのです。

2年間の活動の中で、元気を取り戻した二人を紹介します。ひとは中学生時代かあら引
きこもっていた青年。ヨーガの姿勢をした後毎回筋肉痛が出ました。日頃同じ姿勢をとる
ことが多いからです。もう一人は精神障害の家族を抱えた方。呼吸と体を意識して「今・
ここ」の自分に気づくことが日常の中でもできるようになり、持っていた不安を軽減する
ことができました。呼吸と心と体は、相互に働きかける関係をもち、意識することの大切
さを実感した時でした。(s r尾崎)

散歩：散歩のメニューは、身体的な理由で物理的にサロンに来られない人、みんなで話す
のが苦手な人、平日の昼間のサロンに参加できない人、水いっぱいに関わりたけれどサ
ロンでは関われない人を対象にした活動として、ヨーガとお散歩の2本立てで始まりまし
た。活動内容は、越谷市内の駅に集合して片道30分強歩いて目的地について30分くらい
お茶（そこでお菓子やお茶を飲みながら楽しめます。消費カロリーよりも摂取カロリーが
上回ってしまうのでダイエットにはならない散歩です）。そして30分くらい歩いて最寄
りの駅に戻って解散。

お散歩の良さは、歩くのが純粹に気持ちよいし、おしゃべりもしたい時にすればよいし、
みんなと一緒にいるのだけれど、自分のペースで過ごせることです。また、のんびり歩い
てみると、道端に咲く花に気づき、それが皆との話題になります。自分一人で歩いてい
ては気づけないことに気づかされます。適度な運動、心地よい会話、そしてみんなでいる
けれど一人にもなれる。お散歩にはそんな良さがあります。越谷の町を歩いて、お菓子を食べ
て、体重は減らないけれど、心はちょっと軽くなる。そんなお散歩が越谷でひっそりと
行われています。(渡邊さん)

(4) 夜のサロン

【毎週水曜日(18時から21時) 憩の家にて ボランティア1名】

毎回5~10名の方が集まります。集まる人は様々で、慢性的な病気を持っている方、心
の障害を持った子どものいる方、親との関係がうまくいかない若者、独身で話し相手がほ
しい方、一緒にお酒を飲んで話したい方、仕事などの悩みを持った方等。だんだん常連に
なって、相手を気遣うことができるようになってきました。皆が相手を心配するようにな
り、そのことによって何か互いに慰められています。互いに慰めたり、慰められたりして
います。カトリック信者が60%くらいですが、信者か、信者ではないかに関わらず、壁も
なく話ができるようになりました。(斎藤さん)

(5) フットサルとランチ

【不定期 土曜午後 越谷市内フットサルコートにて 参加者 5~12 名】

散歩では物足りない人、もっと汗をかきたい人に向けての企画です。とは言っても、サッカーと違ってコートも小さいし、疲れたら休んでもいいし、子どもから大人まで楽しめるので誰でも参加できます。気軽に誰でも参加できるフットサルです。(二階堂さん)

3 おわりにかえて

先日の復活祭の数日前に、教皇フランシスコの言葉が書かれたイースター・カードが憩いの家に届きました。使徒的勧告「福音の喜び」からとられた言葉です。この言葉をかりてこの原稿を結びたいです。

「出向いて行きましょう。すべての人にイエスのいのちを差し出すために出向いて行きましょう。ここで、ブエノスアイレスの教会の司祭と信徒には何度も申し上げたことを、全教会のために繰り返します。わたしは、出て行ったことで事故に遭い、傷を負い、汚れた教会のほうが好きです。閉じこもり、自分の安全地帯にしがみつくと気楽さゆえに病んだ教会よりも好きです。中心であろうと心配ばかりしている教会、強迫観念や手順に縛られ、閉じたまま死んでしまう教会は望みません。わたしたちが憂慮し、良心のとがめを感じるべきは、多くの兄弟姉妹が、イエス・キリストとの友情がもたらす力、光、慰めを得られず、また自分を迎えてくれる信仰共同体もなく、人生の意味や目的を見いだせずに生きているという事実に対してです。過ちを恐れるのではなく、偽りの安心を与える構造、冷酷な裁判官であることを強いる規則、そして安心出来る習慣に閉じこもったままでいること、それらを恐れ、その恐れに促されて行動したいと思います。外には大勢の餓えた人がいます。そして、イエスは倦むことなく、たえず教えておられるのです。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」(マルコ 6・37)」(EG49)

憩の家水いっばいの歩み

2011/11/26	2011/11/31	2013/8/6	2013/10/19	2015/5/13	2016/5/7	2017/2/13
越谷伝道所 開所	昼サロン開 始	聞き屋開 始	ヨガ・お散 歩開始	夜サロン 開始	フットサ ル開始	5周年感謝 の集い